平成 27 年度　第 3 回地域福祉活動計画策定・推進評価委員会　会議録

日　時：平成 27 年 8 月 24 日（月）18：30～20：30
会　場：本庁舎アトリウム地下　多目的会議室

１．事務局長挨拶

本日はお忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。推進部会を中心に計画原稿を調整・作成し、たたき台として上げさせていただいた。忌憚ないご意見を賜りたい。今後のスケジュールだが、まずは、本日いただいたご意見をもとに修正を加えたものを再度ご提示する。その上で 10 月 9 日から 25 日の間にパブリックコメントの募集を行い、更に修正を加えたものを 10 月 27 日に予定している次回委員会でお示ししていく。よろしくお願いします。

２．配布資料確認

資料 1　　第 4 次計画素案
資料 2　　第 4 次地域福祉活動計画策定までのスケジュール（案）
資料 3　　地域福祉協働推進員（ネリーズ）の進め方について（案）
資料 4　　地域福祉協働推進員（ネリーズ）説明会でいただいた意見と返答
資料 5　　地域福祉協働推進員（ネリーズ）缶バッジデザイン
当日配布資料
　　地域福祉・福祉のまちづくり総合計画の策定について

３．練馬区地域福祉・福祉のまちづくり総合計画について

当日配布資料を用いて説明

【質疑応答】

委員長　区政改革との関連もあり、スケジュールが遅れ気味であるとのことだが、今後大きく内容が変更される可能性はあるのか？区の計画と社協の計画の整合性をとっていくという意味でも確認しておきたい。

区職員　基本的に、方向性が大きく変わることはないと考えている。

委　員　区長が変わり、施策等に大きな変更は出てくるのか？

区職員　少なくとも地域福祉の分野においては､区長が重点的に取り組むこととして挙げている 18 項目の 1 つでもあり、大きく方向性などが変わっていくことはないと考えている。出張所などの拠点を利用してさらに取り組みを充実させていく方向にあるかと思う。

委　員　「区政改革」というのは、どのような形で議論されているのか？

区職員　区民や学識経験者を交え、議論が交わされている。

委　員　「地域見守り支援係」は具体的にどのような役割を担うのか？

区職員　まずは、地域で活動する町会・自治会・民生委員など、様々な活動団体のネットワーク化を目的に情報交換・情報共有の強化を担う。そこから顔の見える関係づくりを行っていくことで、自ずと見守りへと繋がっていくのではないかと考えて取り組んでいる。

区職員　春から地域見守り支援係となった。コミュニティや繋がりを意識して、地域の気づきを増やしていくこと、活動のすそ野を広げていくことが大切だと考えている。より安全・安心な街づくりを

目指して取り組んでいきたい。

社協職員　この部分に関しては、社協も大きく関わっている。ある意味で地域福祉コーディネーターの活動と重なる部分があると捉えている。地域の見守り拠点事業を受託したこともあり、人員も増員となっている。

委員長　社協には地域福祉コーディネーターが 3 名になったということか？

社協職員　従来の地域福祉コーディネーターが 2 名、この見守り拠点事業の部分で 1 名、介護保険の方の生活支援コーディネーターとして 1 名。社協としては全て地域福祉コーディネーターの名称で呼ばせていただき、計 4 名となっている。

４．第４次地域福祉活動計画素案について

資料 1・資料 2 を用いて説明

５．地域福祉協働推進員について

資料 3・資料 4・資料 5 を用いて説明

【質疑応答】

委　員　Ｐ14 の図についてだが、「ネリーズ」の位置がいかにも孤立しているような印象を受ける。もう少し中心にするなど配置を検討できないか。

社協職員　作成の意図としては、第 3 次計画の図から発展させたことが分かりやすいよう、あまり配置を動かしたくないという思いがあった。ネリーズの位置や枠の表現については、改めて検討していきたい。

委　員　Ｐ15. 1. ②の部分には 7 行に渡る長文があるが、整理した方が読みやすくなると感じた。また、Ｐ17 の図については、左下の子育て中の母親の付近にある「？」の意味が分かりづらい。

社協職員　「？」については、ネリーズのカルタにある「相談したい」という気持ちをどう表現したら良いかと考え、加えてみた。分かりづらいようであればカットしたい。

委　員　委員への文章依頼について、締め切りも併せてもう一度確認したい。

社協職員　「第 4 章 計画への期待 2 地域福祉活動計画策定・推進評価委員から」として、150 字ほどの文章を 9 月下旬までに総務係へご提出願いたい。メール・FAX・お手紙など形式は問わない。

委　員　感想になるが、原稿を読んで「昔の濃密な社会に還していくこと」がイメージされた。助け合うことが当たり前だった時代の情景が浮かぶようだった。

委　員　Ｐ14 の図についてだが、地域づくりには地区区民館や青少年育成地区委員会、老人クラブなども活用していけると良いのではないか。今後介護支援者が不足するという話もある。そういった事案に地域ごとに目を向けていけるようになると良いのではないか。私たち住民の手で地域福祉を自ら進めていく、ということが重要であると感じる。

委員長　Ｐ14 の図に、河本委員のお話の内容なども反映させていけると良い。

委　員　「ネリーズ」は組織として立ち上げていくのか？

社協職員　1 つのグループや団体として、といった形での組織化は考えていない。それぞれが持っている情報を出し合おう、分かちあおうという時に集まれると良いかと考えている。

委員長　Ｐ14 の図中のグループや団体の名称ひとつひとつに「ネリーズ」の記載をしていってはどうか。缶バッジの絵柄を縮小し、貼りつけていく方法などでも良い。

社協職員　ぜひ取り入れていきたい。

委　員　Ｐ10 の表中の「災害時にも対応可能な地域の関係づくり」に、災害ボランティアセンターについ

ての記述がある。機能させていく為には災害時のニーズ把握が必要だと思うが、災害時に誰がそのニーズを災害ボランティアセンターに伝えてくれると想定しているのか。

社協職員　区との協定に基づく取り組みなどについては、後程、ボランティアセンター所長から説明する。先日、木内委員の所属する町会にて、避難拠点連絡会の方々に災害ボランティアセンターについて説明する機会をいただいた。避難拠点連絡会の状況を災害ボランティアセンターに伝えること、また災害ボランティアセンターの存在を認識し、周囲に伝えていくことが避難拠点連絡会としての役割の一つだと理解していただいた。災害の時には、特に情報が行き交うことが難しくなる。そんな時に、災害ボランティアセンターに行けばどうにかなるということを避難拠点連絡会に知っておいてもらい、災害ボランティアセンターにおいても、避難拠点連絡会に木内委員の町会も加入していると知っておくことで、いざという時にも連絡が取りあえる。そういった事前の準備によって、実際の災害時にも必要なことが分かってくるのではないかと考えている。

社協職員　区との間で震度 6 弱以上の地震等、一定条件を超える災害時には練馬文化センターにおいて災害ボランティアセンターを立ち上げる協定を結んでいる。実際にニーズが分かるのは、当事者である地域の方々であるが、こういった情報を知らない住民の方もまだまだ多くいる。日頃から災害ボランティアセンターの存在を知っていただくことで、災害時にボランティアセンターに情報が集まってくるような形を整えておくことが重要だと考えている。

委員長　かなり大きな地震を想定しての話が進んでいるかと思う。そうなると、数日経った状況では避難所に被災した人がいる状況が一般的になる。避難所において避難拠点連絡会が組織されていて、役所や災害ボランティアセンターと繋がっていれば、相当部分のニーズは把握することができる。避難所に避難しない人に関しては、災害ボランティアセンターに集まってくるボランティアを活用するなどしてニーズの把握を行っていく必要がある。そういった準備を行うために、区と社協が協定を結び、どのように災害ボランティアセンターを立ち上げるのか、また立ち上げた後にどうしていくのかといった訓練を年 1 回行うなどしている。

委　員　話を聞いて、知らない事ばかりだと感じる。一般の住民の感覚はこの位だと知ったうえで周知していけると良いのではないか。

委　員　地域でエレベーターの管理会社を呼んで、災害時を想定したエレベーターからの脱出訓練を行っている。地域住民が自らできることを増やしていくことも必要だと感じている。

委　員　河本委員の話を聞いて、同じ区内でも地域によって随分と取り組みに差異があると驚いている。「災害」は人を動かす強い動機になり得る。「災害」をキーワードにして、色々と意識を高めていく方法があるのではないかと思う。

社協職員　9 月 27 日に社協主催、区の防災課協力による災害シンポジウムを企画している。後日書面でお知らせさせていただくので、ぜひご参加いただきたい。

委　員　原稿を読んだ感想として「ネリーズをいかに理解してもらうか」がポイントになってくると感じた。「ネリーズ」の考え方がそこまで一般的ではないと思われる中で、自分自身の理解を進めていくためには、資料にあった説明会での質疑応答がとても参考になった。また、地域の「過度な関心」を嫌がる人も多い中では、「つながりのある地域をつくる」よりも「ゆるやかに見守り合える地域づくり」の方が良い響きだと感じられた。過去の経験から、ネリーズを広めていく際には、犬に関心を持つ人の多さを活かさない手はないと考えている。グッズに関しては、缶バッジも良いが毎日必ず身に付けるものではないと思うため、「自転車につけるもの」や「学校や施設に貼るもの」などのアイテムも検討していけると良いと思う。

委員長　広報媒体としては、いくつか種類があっても良いのかもしれない。P 17 の図に関してだが、もう少し内容や表現を検討し、分かりやすくできると良いのではないか。

社協職員　以前副委員長から提案のあった「誰でも読みやすい、絵本のように」を意識しながら作成している。内容や表現に関してはさらに検討していきたい。

委　員　「自助」「共助」「公助」とある中で、素案の内容としては「共助」がメインなのかな、と感じた。「自助」をどう支えるかという部分も大切だが、「公助」にどう働きかけていくのか、いけるのか、という部分がよく分からなかった。専門機関だけでは支えきれない部分をどうしていくか、地域の住民にどう関わってもらうと良いのか、計画の中で考えていけると良いのではないかと感じた。考えているところがあれば知りたい。

社協職員　「専門家の支援だけでは難しい」との気づきから「地域福祉コーディネーター」が最初は住民リーダーとともに地域で活動を始めた。地域住民の支え合いが薄い所でも孤立しないようにやっていけるのではないか、という発想からネリーズが生まれている。

委員長　行政の計画ではない地域福祉活動計画が何をやるのか、「公助」にどう関わるのかが書かれていないのではないか、というのが坂元委員の指摘。Ｐ13（3）①の「地域福祉計画との連携」の部分などにもう少し記述があっても良いのではないか、ということ。

委　員　素案についてだが、コアなサービスが必要なところは行政が支え、ネリーズやネリーズよりももう少しコアな担い手のところを社協にも手伝ってもらっているので、そのあたりを記載していけると良いのではないか。また、Ｐ8・9 辺りの「目標」や「方針」といった文言の使い方が少し整理できると読みやすくなると感じた。なお、Ｐ13 の地域福祉計画に関する記述部分に関しては、現在進行形で議論がなされている部分でもあるため、今後も随時調整をさせていただければと思う。

委員長　時間の関係もある。これ以降の意見は 8 月中に事務局まで。

６．まとめ

副委員長　「誰でも読みやすいものにしてほしい」という要望を伝えたが、現時点でページ数が半減となっていることで、まずは 1 つ読みやすくなっているのではないかと思う。本日、各委員が様々な意見や要望を出してくださっているので、良く内容を検討し、さらに読みやすいものにしていって欲しい。以前の農村共同体のような繋がりに息苦しさを感じる人も多くいる。今の世の中では、自らやれることはやり、できないことは助けてもらうということが大切。また、「Ｎｏ」と言える、相手の「Ｎｏ」を受け入れられるという自立した関係をつくっていくことが大事だと改めて思った。

委員長　先ほども伝えたが、追加の意見は 8 月中に事務局まで。事務局は、それを練って一度委員に返したうえで、パブリックコメントを募り、さらに 10 月 27 日に向けて整えるよう願う。

７．次回の日程について

10 月 27 日（火曜日）18：30～　会場はココネリ研修室 1

以　上